

『フェンスレス』オンライン版(第四号) ● 特別付録 資料1

---

『日本プロレタリア作家同盟第二回大会 貴司山治自筆提案書』

## 新発見資料

『日本プロレタリア作家同盟第二回大会 貴司山治自筆提案書』解説

伊藤 純

### ●資料の概要

最近（二〇一五年）発見された『日本プロレタリア作家同盟第二回大会 貴司山治自筆提案書』（以下「提案書」と略記）は、表紙とも二十八頁の冊子（16 cm×24 cm・いわゆる半紙版袋とじ）で、謄写版印刷だが、その筆跡は貴司山治自筆と推定できるものである。

冊子の表紙には「大会議事録附録」と書かれており、二頁目に、同盟員提出議案として「文学大衆化の問題」など四つの議題が列記されている。

そしてこの印刷物は、版面の一部に、謄写版を沢山印刷した場合に生じる特有の原紙の破れが認められるので、恐らく数百部印刷されたと考えられる。また、文意がつながらなくなるような乱暴な墨消しが二十個所に亘って加えられている。

この墨消しの意味は、山田清三郎の記述から推定できる。山田清三郎は『プロレタリア文学』一九三二年四月号に「大会を通じて同盟の発展を見る——第五回大会を前にして」という長文の記事を掲載しており、この中に第二回大会についても比較的詳しく述べているのである。

それによると——日本プロレタリア作家同盟（以下「ナルプ」と略す）第二回大会は東京本郷の仏教青年会館で、一九三〇年四月六日午前十時から開会される予定だったが、直前になって臨席警官の干

渉により議案書の一部抹消が強制され、その抹消作業のために開会が一時間以上遅れた、と記されている。

これらのことから、今回発見された「提案書」は、実際に大会会場に持ち込まれ、そこで墨消し作業が強制された上で討議のために会場に配布された議案書の「付録」、貴司の「提案書」現物の一冊であることが推定できる。

### ●ナルプ第二回大会と「提案書」

ナルプ第二回大会は「文学大衆化問題」が議論された大会として、プロレタリア文学史に記憶されている。前記山田清三郎の記事の中にその大会の議題が書き留められている。すなはち——

- 一、開会の辞（立野信之）
- 二、議長副議長選出
- 三、大会書記任命
- 四、友誼団体祝辞
- 五、同盟報告（山田清三郎）
- 六、作家活動報告
  - (イ) 小説（立野信之）
  - (ロ) 戯曲（久板栄二郎）
  - (ハ) 詩（中野重治）
  - (ニ) 児童文学（猪野省三）
  - (ホ）批評（藏原惟人代中野重治）
- 七、役員選衡委員選出
- 八、中央委員会提出議案
  - (一) 一般活動方針（川口浩）

(一) 報告文学 (鹿地亘)

(二) 同人雑誌聯盟組織 (鹿地亘)

(三) 綱領及び規約変更 (川口浩)

(四) 「戦旗」三千円基金募集 (壺井繁治)

#### 九、同盟員提出議案

(一) 文学大衆化の問題 (貴司山治)

(二) 同盟員統制 (同)

(三) 作品研究会設置 (同)

(四) 機関紙発行 (同)

……以下略

などであり、この九番目の「同盟員提出議案」という四項目が、本資料に一致する。しかし、山田文書では、この「同盟員提出議案」については言及がなく、どのような討議があったのかはわからない。唯一、今回発見された「提案書」(大会議事録附録)が、提案の内容を具体的に伝えるものと考えられる。

#### ●ナルプ第二回大会前後の大衆化論争の推移

この「提案書」の位置づけについては、前記山田清三郎が『日本プロレタリア文芸理論の発展』(叢文閣、一九三二年一月)で要約している。――

わが左翼文芸の陣営は、すでに一応解決されたかの如くに見えた『文学大衆化』の問題を、ここに再検討しなければならぬ機会をもつことになった。その直接的動機となったものは、同志貴司山治によってなされた、この問題に関する日本プロレタリア作家同盟中央委員会の方針に対する反対意見の提出である。

また貴司自身、戦後、尾崎秀樹との対談(「私とプロレタリア文学」『文学』岩波書店、一九六五年三月号)の中で――

(※第二回大会の前)自分(※貴司)の考えを来て話せということになって、中央委員会に呼ばれた……場所は下落合の片岡鉄兵の家で……片岡鉄兵、徳永直、鹿地亘、川口浩、山田清三郎、中野重治、立野信之がいました……文学大衆化の問題について……討論会をやったわけです。引続き、それを四、五回やったかな。

と述べており、さらに大会のあとでも議論が続き――

……私は中央委員にさせられました。それで大衆化問題の続きをやらなければならぬ……四月ごろから四、五回ぐらい中央常任委員会ですそれを討論したんです。

と述懐している。

この、大会後の中央常任委員会らしき会合での議論の様子は、江口渙が極めて具体的に、『たたかいた作家同盟記――わが文学半生記・後編上』(新日本出版社、一九六六年八月)に書き留めている。

たしか第二回大会がすんだあとの四月もおわりに近い天気の良い暖かい日だったとおぼえている。……中央委員の大部分が下落合の片岡鉄兵の家に集まることになった。……討論の中心的な対象者である貴司山治はもちろんのこと、中野重治、立野信之、大宅壮一、藏原惟人、壺井繁治、鹿地亘、江口渙、窪川鶴次郎

などの顔がそろう。

（\*大宅壮一の発言・おそらく『譚談倶楽部』一九二八年七月号に掲載の貴司山治「獅子を殺す男」について）「争議団の闘士が社長の大資本家の家におしかけていって、玄關につないである用心棒のライオンをいきなり撲り殺すところがあるな。あんなのいかに何でもでたらめすぎるじゃないか」

（\*貴司）「しかし、きみ。ああいう事を書く読者がとてもよろこぶんだ」

「読者がよろこぶことと、その作品がいかにか悪いかは別問題だよ」

とだれかがいう。

「でも、読者がよることを読んで読んでもくれないものをいくら書いてもしようがないじゃないか」

（\*「ゴー・ストップ」についての壺井繁治の発言）「……争議団の闘士がストライキをぶちこわしに来た暴力団の親分を斬りつけ、闇にまぎれて逃げるところがあるね。……逃げ場にこまっていきなり橋の上から隅田川にとびこむ。……闘士はそのときまたまた橋の下を上流に向かって通る汽船のカジにつかまって……船の上に助け上げられる。……その若い船頭はまえに徳島県の塩田労働組合の争議のとき、その助け上げられた闘士の身代わりになって留置場に二か月もぶちこまれたことのある同じ青年同盟の同志であったとわかる、というところがあるだろう」

「うん。あるよ。それがどうした……」

「世の中にあんな都合のいいまわり合わせなどというものがあるもんじゃないと思うな。……われわれの文学ではあんなふう偶然性の上ばかりにのっかって事件が飛躍するのではなく」

て、もつとリアルに問題を発展させなくってはいけないんじゃないかとぼくは思うんだがね」

……貴司山治はひどくふきげんになって……にわか黙りこんでしまった。

……帰りは貴司山治といっしょだった。（\*江口と貴司は同じ吉祥寺に住んでいた）

「きょうの討論はなかなかさかんだったね」というと、貴司山治はそれに答えずただひと言、

「壺井という男はバカだね」……

と吐き捨てるようにいったと書かれている。

昭和五年の大衆化論争が、具体的にどのような問題意識で論議されていたのが、どんな論文よりも分かりやすく見えてくる一文である。

### ●大衆化論争の帰結

「提案書」が提出された作家同盟第二回大会の三ヶ月後、『戦旗』（第三巻第十号）に大衆化論議を総括するかの如き作家同盟中央委員会の「芸術大衆化に関する決議」が掲載されるが、これは「芸術大衆化決議」と題しながら実質は「大衆化を拒否する決議」となっている。要約すると――

- ①何等かの特別な大衆芸術の形式が存在するかの如きは幻想である。意識水準の低い大衆を目安にする大衆芸術では「イデオロギー」を割合ゆるやかに「水を割ることが許される」というのは誤りである。

- ②在来のリアリズムも通俗化された大衆芸術も共に、実生活の

基礎を失った芸術形式である。過去の形式が直ちに我々の形式となることは絶対にはあり得ない。

③芸術大衆化の唯一の目的は、広汎な労働者及び農民大衆の中に、革命的イデオロギーを浸透せしめることに他ならない。仮にある作品が如何に多くの大衆の反響を獲ち得たにしても、若しそれが革命的プロレタリアートのイデオロギーによつて大衆を捉えたのでなかったら、このような大衆化は全く無意義である。

結局貴司のいう「文学大衆化」と作家同盟幹部の考えた「大衆化」とは、噛み合うことのない別世界の想念だったといわざるをえない。昭和五年という時点でのプロレタリア文学運動の一つの姿を伝える資料である。

『日本プロレタリア作家同盟第二回大会 貴司山治自筆提案書』

書き起こし（伊藤 純）

凡例

- ・ 仮名遣いなど、すべて原文のままとした。
- ・ 墨消し部分は「|||」で示した。

（表紙）

『大会議事録』附録

（2頁）

同盟員提出議案

- 一、文学大衆化の問題 貴司 山治提出
- 一、統制に関する件 同
- 一、作品研究会設置の件 同
- 一、機関誌発行の件 同

（3頁）

文学大衆化の問題 提案説明書

貴司 山治

はしがき

この問題については、この大会の直前、大宅壮一、徳永直、私などが特に中央委員会へよばれて行って、いひたいだけいふといった懇談の形で議論をしたのである。その結果中央委員会と、特に私との議論が違った。

それを時間がたりないためにあと十分討論をつくす機会がなくなつ

た。で、お前のいふことは、別に議案として大会へ提出しろといふ中央委員会の命令である。私は一同盟員の自由討論のために、中央委員会がしかく深切な手続をとられたことを同盟員として感謝する所である。——そこで私は自分の考へのその後の考へ方をもつけ加えて、私の提案の趣旨をなるとだけ詳しく説明することにする。

一、問題は一昨年度に於いて解決されてゐる。

プロレタリア文学大衆化の問題は作家同盟内では一昨年度（一九二八年）に於て（\*次頁行頭へ）

（4頁）

大体正しく論議されてゐると思ふ。この年の議論の代表的なものとして

プロレタリア大衆文学の問題

林房雄

いはゆる「芸術の大衆化」について

藏原惟人

プロレタリア芸術確立運動と大衆の直接的アヂプロ 同

解決された問題と新しい問題

中野重治

之等を通じて行はれた議論を要約すると、一九二八年以来、大衆的に発展したプロレタリアートの政治活動の必要に、おのづと動員された文学はプロレタリアートの活動の影響を大衆に向つて拡大伝播し、又あらゆる社会現象の「」を急速に自覚した結果、今迄のわれ／＼の作品行動を、より強力に大衆化しなければならなくなった。

之、大衆化論の起源であつて、われ／＼はその大衆化の方法をより正しく決定せんがために一応「プロレタリア芸術」の定義的吟味に迄

遡つた。

そしてそこから今迄「」を本来的プロレタリア芸術とし「比較的單純な比較的初歩的な内容によつて幾百万の大衆を感動せしめ得るやうな作品」をそうでない大衆的よみ物と思つてゐたことが間違ひで（\*次頁行頭へ）

（5頁）

実はそのどちらもが本来的プロレタリア芸術であるといふことに、結論を見出した。即ちプロレタリア芸術は本質として大衆的なものであり、大衆的でなくしては、その本質的存在のありえないものだといふことが見出されたわけである。

でわれ／＼の表現形式を切実に大衆化するにはどうしたらいいかといふことについては、進んで、中野重治は「取りかかるべき仕事の問題」として、われ／＼の作品が労働者農民の間に現実にどの程度にうけ入れられたのかを、一定の方法によつて判定し、それを一定の方針でセイリしつゝより眞実なプロレタリアートのための芸術を育て上げ発展させなければならぬといひ、之が芸術大衆化問題を具体的に解決する発足点だと説いた。

即ち大衆化の問題は実践上の問題となつてゐるのである。

二、実践の欠如が問題を紛糾させている。

ところが昨年度（一九二九年）においては、この問題が恰もわれ／＼の間に何等の解決もたらされてなきが如き様子で中心の問題となつた観があつた。



でよまれるだらうといふやうな、まんなたる態度で書くことをやめなければならぬ。でわれ／＼の作品の目標とする「大衆」を階級に従つてまづ労働階級と農民階級にわけて認識しなるべくおの／＼の場合には、その階級に適當する題材を持ち込むやうにする。

そして、両階級を通じてその發達に応じて組織層に向かつてはなるだけ「複雑な高い社会的内容を力強い芸術的單純さで表現した」ものを持ち込み（戦キ（\*戦旗））に書く場合などが之に該當すると思ふ）未組織層に向つては「比較的單純な、比較的初歩的な内容による作品を持ち込むやうに努力する。

この考へ方は「初歩的内容」（＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝  
＝＝＝＝＝＝考へる）の作品を認める点において、＝＝＝＝＝＝  
＝＝＝＝＝＝  
＝＝＝＝＝＝  
「大会議事録」の空（\*次頁行頭へ）

（9頁）

氣に相反する如くみゆるのを、進んで指摘して置きたい。私の考へではイデオロギイの強化といふことは、質的に考へられると共に量的にも觀察されなければならないと思ふ。そして、質的の強化といふことは、現在の社会に於いてよほど困難な制約をも伴つてくる。即ち検閲制度からの一大制肘である。質的強化は、理想的ではあつてもそれを採殺する権力機関が一方に儼存する以上現実的には、ある程度迄しか実現されえない。無限の強化は作品活動には到底行はれないといふ現実を認識してかゝらなければならない

（10頁）

い。配布網の拡大強化を以て幾分之を救ひうることは事実であらう。（\*傍線は赤色手書き）けれどもそれにも限度の予想されなければならないことは我々は幾多のプロレタリア刊行物の経験によつて知らせられてゐる。

非常に文化的水準の低い——例へていへばブルジョア大衆文学の膝下に眠れる百万の未組織大衆には高い複雑なプロレタリアイデオロギイを受け入れる力はないであらう。その時かれらが受け入れうる「比較的單純な比較的初歩的な」プロレタリア・イデオロギイを以てかれらをブルジョア大衆文学の影響下からこちらへ（\*次頁行頭へ）

獲得する作品を書く仕事は——「戦旗」を通じて行はれる可なり＝＝＝＝＝＝  
＝、又当面の重要性の少い仕事と思はれる。それだからさういふ仕事は「複雑な高い」内容を受け入れうる先進労働層（組織層）をアジプロする文学の仕事よりも意義が少く、又それは「作品の内容をもつとも後れた農民或は労働者の水準にまで低下させる」（藏原の言葉）といふことによつて＝＝＝＝＝＝  
＝排撃

されなければならないものだらうか？  
藏原はこのことに関して「過程的」にさやうな低い「大衆を目安にする芸術」と＝＝＝＝＝＝  
＝「芸術との区別とその必要を必然的に認め、そして双方共「芸術的であることに変りはない」といつてゐる。同時に「真のプロレタリア大衆芸術は＝＝＝＝＝＝



(11頁)

「ともいつている。私はこゝで藏原の本意が十分にわからないのである。|||||」  
「あらはれる  
如上二つの型の芸術を、芸術であることに変りはないと（\*  
次頁行頭へ）

いひつつも「過渡的な何等か劣った芸術である」といふ風に考へるのではなからうか？  
もしさうだと仮定すると、藏原の現実を把握する弁証法的方法がそこでは曇つてゐるのではあるまいかと思ふのである。

我々は問題を飽く迄も我々の現実から離してはならないと思ふ。我々は|||||

どんな世の中になつても大衆の中におくられた層と進んだ層のあることは凡そ事実である。現在は尚更その通りになつてゐる。我々は進んだ層への仕事（戦旗読者層の組織の仕事）と同様の価値において、おくれた層への働きかけの意義を設定することはできないのだらうか？ おくれた層は量的には非常に多い大衆である。之は政治的にさへ又経済的にさへ組織されてゐないとすれば、文学的に組織することなどは当分の間、可なり強硬に不可能であらう。といふことをいひかへればこの層は現在「戦旗」を受け入れうる文化

(12頁)

的（\*次頁行頭へ）

水準を持たない広汎なる大衆である。

進んだ大衆層への文学活動に検閲制度の強力なる制肘<sup>マ</sup>をうけ乍らも|||||  
「ならば、此のおくれた広汎なる大衆へ、初歩的な、ゆるやかにされたプロレタリア・イデオロギイを注入する文学的活動は、かかる「強化」を増量するものではなく、その解消を図る危険なる企てであらうか？ どちらだらうか？

今迄だからも確定的には答へられてゐないように思ふこの問題を、私は自分自身で探索し、ゆるがせにしてはならない必要なる仕事だと考へるやうになり、この「もつともおくれた層」に対する文学活動を、むしろ「文学大衆化」の一番困難な先端の問題として、先に考へてきたのである。

そして私自身の経験から、その表現形式の出発点となしうべきものをブルジョア大衆文学の中から見出した。

こゝでふれておく。

「大会議事録」中十八枚目の批評に関する報告の「芸術大衆化（\*次頁行頭へ）

(13頁)

の問題」の中に述べられてゐる二つの点、即ち私が「議事録に対する質問書」でふれた

一、|||||



(16頁)

いと思ふ。しかし、そこに現はれてゐるイデオロギイ的表現形式には大いに教へられるものがある。筈だと思つて調べてみたが、「有り合はせの社会主義的常識」が一番多く拾ひ出されるといふ事實にぶつかつた。それが最近号になると、文体がとゞ(\*次頁行頭)

のひ、イデオロギイ的用語もふえてゐる。之が果して先進的労働者農民の記述とすればこの層は「既に可なり高い文化的水準を獲得した」層で、むしろ戦旗を通じて逆に「太陽のない町」や「蟹工船」などの影響を受けてゐはしまいか。

之等の報告文学中、私の一番喜ばせられたのは殆んど一致して記述が急テンポで単純であるといふ現象だ。私は前からこの急テンポの形式をブルジョア作家菊池寛の作品からみつけだし、単純さを菊池及び中村武羅夫からみつけだして「プロレタリア小説」の形式に換可して使つてゐる、といふやうなことを参考に申しのべる。

しかし「報告文学」中からは、構成的な小説の文章に必要な形式がちよつと見出しかねる。小説の文章は、構成的でなければならぬ。特にプロレタリア長編小説には構成力のある言葉が入用だ。それらは、たとへば某ブルジョア作家が若い恋人と別れて汽車にのつて立つて行く男の気持を、汽車が動き出すと、プラットにだん／＼小さくなつて行く女の白い顔を見て「あの顔だけが真実で、世の中がイカモノになつたやうな感じがした。」といふ手短かな言葉で現はしてゐるが、私はこの構成力の(\*次頁行頭)

(17頁)

ある洞察のきいた言葉は労働者にもわかると思ふ。何十日ぶりかで苦しい留置所から出て来た労働者が、いきなり春の夜の銀座の角にでもほり出された場合の感じを「  
|||||と前の言葉を換化して表はすとする。私なら之をそのまま、チャーナリズムを通じて、対象層の中へ送りこむ。そして何等かの方法で直接の反響をきこうとさせる。失敗してゐるか、成功してゐるか。成功してゐるとわかればその言葉はもう試験済だ。かれら自身の言葉に換化して行つたものと考へたい。

又、神田伯山の「清水の次郎長」の中に黒駒の勝蔵の子分が、次郎長の所へ何かのかけ合ひにのり込んで行つて、こつびどくやつつけられる場面がある。そこは大衆の最も痛快を感じる心理的な場面だ。伯山は、にげてかへつて、親分勝蔵にそれを報告する子分の言葉によつてもう一度その場面を——心理的快感を——聴衆に向つて再演する。次郎長の言葉が敵の子分の言葉に變つて二度同一場面で演ぜられる構成法、そこにびつたりあらわれてくる言葉——それは、その構成法が争議団代表者が資本家と会見する切迫した感興のある場合を団員にそれを報告(\*次頁行頭)

(18頁)

するかれの又別の言葉で再現することによつて読者の感情の沸騰を二重にすることができたらうが、そういうびつたりと小説の構成にはまる言葉といふものは「報告」文学に



(四)次にもし私の右の提案が認められるのならば、作品行動の「場所」の問題がより正しい見透しの下に解釈されなければならぬ。

即ち我々の作品行動は主として、「進んだ層へ」のためには「戦旗」、戦旗社から出版する単行本、パンフレット、リーフレット、及地域的工場新聞雑誌、同盟に組織されたる同人雑誌を作品行動の場所とするやうになりはしないか。

又「おくれた層」への働きかけには主として右の凡ての場合の外、ブルジョア新聞雑誌単行本等が必要とされはしないか。(＊次頁行頭へ)

## (21頁)

この区分は嚴重な規定でないことは勿論で、交互に適當に利用せらるべきであらう。

ただブルジョア出版物の利用について議事録は消極的な防衛的態度をとつてゐるやうである。しかし私の考へではブルジョア出版物中、自由主義的諸雑誌は主としてイデオロギイ的訓練のあいまいな知識階級層に、又その他の出版物、新聞等は主として「おくれたる大衆層」にアチプロする正當なる任務の下に積極的に利用されなければならない。それは少しでも階級的建設のために客観的価値ある凡ての形態を利用する。この態度として、採用すべきが至当だと考へるのである。

「議事録」では、この根本原則が(一)戦旗社出版部の事業との利害の衝突といふこと、(二)従来ブルジョア・チャ―ナリズムに應じて行つた同盟員中の一部のイデオロギイ

## (22頁)

的操持のルーズさに対する反感などのために一時掩ひかくされてゐるかのように見受けられる。もとより、戦旗社の出版物を守らず、又同盟員たる左翼的立場を利用して売らかなのいゝ加減なプロレタリア芸術の制作に専念するものがあれば、それは許せない階級的罪悪であるであらう。

しかしそれとは別に「ブルジョア出版物の意義を過大評価することは日和見主義への逸脱だ。ブルジョア出版物を通じては我々の文学的影響の結果を組織することができない。それは唯その影響を大衆の中へ解消するに過ぎないからだ」といふ議事録の意見はその限りにおいては十二分にその通りである。

けれども既に提案してゐる通り、組織は出来なくとも、歴史のある重要な時期において、広汎なるおくれた大衆層を反動勢力群に変化させることを前以て防ぎとめることに役立つよう、彼等の数多くをブルジョア・イデオロギイ下の嗜眠状態からよびさませ、我等のイデオロギイの盛られた文学の読者として極力引きつけておくことはやはり重要であると考へられる。

ただ我々同盟員全体が打つて一丸となつて戦旗社の出版事業に動員され全然他に割くべき余力がないといふ場合には、当面の仕事のために之の仕事が放棄されようとも或はやむをえないかもしれない。けれども我々はそんなにいそがしくはないやうにみうける。「力」は徒らに蓄積され何でもない日常生活のために消費されてゐるやうにみえる。

同盟は戦旗社が消化し剩す同盟員の「力」の大きな過剰のかた



ことを、大会に於て、決定しなければならぬ。  
少くともこの思想的原則は、大会において決議し、以て固き拘束力となすことが必要である。

そして同時に実行部は、同盟員の戦旗誌上からこぼれおちる過剰の力をブルジョア出版物、組織されたる同人雑誌、地域的工場新聞雑誌、その他すべての作品行動の必要なる場所に駆り出す役目をなすべきである。

(26頁)

### 作品研究会設置の件 提案説明書

中野重治のいふ「われ／＼の作品がどの程度に大衆に受け入れられたかを一定の方法によって測定してそれを整理してより真実なるプロレタリアートの芸術を育て上げることに役立てる科学的な方法を探求し、それによって作品の研究を行ふ常置的な研究機関の設置が「大衆化の問題」の重要な一翼としてぜひ必要であり、こゝに決議さるべきであると思ふ。

### 機関誌発行の件 提案説明書

「戦旗」が大衆的に発展して、今では之は大衆のものとなり、最早作家同盟の機関紙でなくなり、大衆の直接的な意志感情の表現機関となつてしまつたことは明らかである。このために会則の一部変更が提案され、文学理論の討議、作品批評の掲載等の同盟の内部活動（\*次

頁行頭へ）

(27頁)

の記録、宣伝のための新しい、主として理論的な機関雑誌の発行が、議事録中に提唱されてゐるが、大会は直ちにこのことを可決しようではないか。そして従来の同盟ニュースなども都合でこの中へ収録してしまつてもいゝと思ふ。

